

【 復活のトロパリ 第6調 】

てんしのぐんなんぢのはかにあらわれしに、
 天使 軍 爾 墓 現

ばんぺいしせしもののごとし、マリアはか
 番 兵 死 者 の 如 し 、 マ リ ヤ は 墓

にたちて、なんぢのいさぎよきからだをたづね
 立 爾 潔 體 尋

たり。なんぢはぢごくにいざなわれず
 爾 地 獄 誘

して、ぢごくをとりこにし、いのちをた賜
 地 獄 虜 生 命 賜

もうものとして、しよぢよにあいたまえり。
 者 處 女 逢 給

しよりふくかつせししゅよ、こうえいは
 死 復 活 主 光 榮

なんぢにきす。
 爾 歸

【 十字架叩拜のトロパリ 第1調 】

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢ
 主 爾 民 救 爾

のぎょうにふくをくだせ、せいきよの
 業 福 降 正 教 うの

ハスティアンらにてきにかたしめ、なんぢの
 等 敵 勝 爾

じゅ うじ か に て なんぢの す ま い を ま も り た ま
 十 字 架 爾 住 處 を 守 り た 給
 え 。

【 十字架叩拜のコンダク 第7調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い
 光 榮 父 子 聖 神 歸 す 、 い 今
 ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
 何 時 世 世

ほ の お の つ る ぎ は す で に エ デ ム の も ん を ま も ら
 焰 の お の 剣 既 門 守

ず 、 け だ し こ れ を し り ぞ く る し え い な る じゅ
 蓋 之 卻 至 榮 十

う じ か の き は い た れ り 、 し の は り お よ び
 字 架 の 木 至 り 、 死 の 刺 及

ぢ ご く の か ち は ほ ろ び た り 、 け だ し な ん
 地 獄 の 勝 亡 た り 、 蓋 な ん

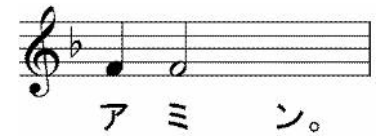
ぢ は 、 わ が き ゆ う せ い し ゆ よ 、 あ ら わ れ て
 ち は 、 吾 救 世 主 よ 、 現

ぢ ご く に あ る も の に よ べ り 、 ま た ら く
 地 獄 に 在 者 に 呼 り 、 復 楽

え ん に い れ 。

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 ねがものちえめいごあたつみおこなものすそのすくいためつうかい
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 たわれらいやふとうなんぢしよぼくこときおいなんぢせい
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 さいだんこうえいまえたなんぢとうぜんふくはいさんえいたてまつたもの
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
 しゅさいなんぢみづかわれらざいにんくちせいさんうたうなんぢじんじ
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 もつわれらのぞわれらおよじゆうじゆうつみゆるわたましいからだ
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 せいわれらしょうがいぜんこうもつなんぢつとえたませいしょう
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生
 しんぢよこせいなんぢよろこびなしよせいじんきとうよ
 神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世
 に、



【 聖三祝文に代えて 】

しゅさ い よ、われら なんぢのじゆうじか
 主宰 我等 爾 十字架
 にふくはいし、なんぢのせいなる
 伏拜 爾 聖
 ふくかつをさんえいせん。しゅさ い よ、
 復活 讚榮 主宰
 われら なんぢのじゆうじかにふくはい
 我等 爾 十字架 伏拜



し、な んぢのせいな る ふくかつをさん
爾 聖 復 活 讃

え い せ ん。しゅさ い よ、われら
榮 主 宰 我 等

な んぢのじゅ うじか にふくは い し、な ん
爾 十 字 架 伏 拜 爾

ぢのせいな る ふくかつをさんえ い せ ん。
聖 復 活 讃 榮

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す、い ま も
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

い つ も よ よ に、ア ミ ン。
何 時 世 世

な んぢのせいな る ふくかつをさんえ い
爾 聖 復 活 讃 榮

せ ん。

しゅさ い よ、われら な んぢのじゅ うじか
主 宰 我 等 爾 十 字 架

にふくは い し、な んぢのせいな る
伏 拜 爾 聖

ふくかつをさんえ い せ ん。
復 活 讃 榮

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

こうえい ほうざ あ つね あが ほ いま いつ よよ
の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 提綱 大齋第三主日 第6調 】

司祭) つつし き しゅうじん へいあん
慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) なんぢ しん
爾の神にも、

司祭) えいち
睿智、

誦經) しゅう なんぢ たみ すく なんぢ ぎょう ふく くだ たま
プロキメン、主よ、爾の民を救い、爾の業に福を降し給え、

しゅうよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに
主 爾 民 救 爾 業
ふくをくだしたまえ。
福 降 給

誦經) しゅう われなんぢ よ われ かため わため もだ なか
主よ、我爾に呼ぶ、私の防固よ、我が爲に黙す母れ、

しゅうよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに
主 爾 民 救 爾 業
ふくをくだしたまえ。
福 降 給

誦經) しゅう なんぢ たみ すく
主よ、爾の民を救い、

なんぢのぎょうにふくをくだしたまえ。
爾 業 福 降 給

【 アポストロス 使徒經 311 端 エウレイ書4章14節~5章6節 】

司祭) えいち
睿智、

誦經) せいしと じん たつ しょ よみ
聖使徒パウエルがエウレイ人に達する書の讀、

司祭) つつし き
謹みて聽くべし、

誦經) けいてい われら おおい しさいちょう しょてん へ もの かみ こあ よ
兄弟よ、我等に、大なる司祭長、諸天を経たる者、イイスス神の子有るに由りて、

われら うけとめ かた まも けだしわれら さいいちょう われら にゆうじゃく たいじゆつ あた
我等の承認を固く守るべし。蓋我等の司祭長は我等の柔弱を體恤する能わ
ざる者に非ず、乃罪の外一切の事に於て、我等の如く試みられたる者なり。故に
われら きぜん おんちよう ほうざ つ きょうじゆつ う おり かな たすけ おんちよう
我等毅然として、恩寵の寶座に就くべし、矜恤を受け、機に合う助として、恩寵
を獲ん爲なり。蓋凡そ人の中より選ばるる司祭長は、人の爲に神に奉事することを
にん ささげもの まつり つみ ため けん もの むち ものおよ まよ もの あわれ
任ぜられて、禮物と祭祀とを罪の爲に獻ずる者にして、無智なる者及び迷う者を憐
むを能す、蓋自も亦柔弱に纏わる、故に彼は、民の爲にするが如く、己の爲
にも亦罪を贖う祭を獻ずべし。且人誰も自ら此の尊貴を受くるなし、乃神に召
さるる者なり、アーンンの如く然り。是くの如くハリストスも、自ら司祭長の尊榮を以
て、己に歸せしに非ず、乃彼に、爾は我の子、我今日爾を生めりと、言いし者な
り、又他章に云えるが如し、爾メルキセデクの班に循いて司祭と爲り、世世に返らん
と。

(比較用 口語訳) わたしたちには、もろもろの天をとおって行かれた大祭司なる神の子イエスがいま
すのであるから、わたしたちの告白する信仰をかたく守ろうではないか。この大祭司は、わたしたちの
弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、
わたしたちと同じように試練に会われたのである。だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵
みにあずかって時機を得た助けを受けるために、はばかることなく恵みの御座に近づこうではないか。
大祭司なるものはすべて、人間の中から選ばれて、罪のために供え物といけにえとをささげるように、
人々のために神に仕える役に任じられた者である。彼は自分自身、弱さを身に負っているので、無知な
迷っている人々を、思いやることができると共に、その弱さのゆえに、民のためだけではなく自分自身
のためにも、罪についてささげものをしなければならぬのである。かつ、だれもこの榮譽ある務を自
分で得るのではなく、アーンンの場合のように、神の召しによって受けるのである。同様に、キリストも
また、大祭司の榮譽を自分で得たのではなく、「あなたこそは、わたしの子。きょう、わたしはあなた
を生んだ」と言われたかたから、お受けになったのである。また、ほかの箇所でもこう言われている、「あ
なたこそは、永遠に、メルキゼデクに等しい祭司である」。

【 アリルイヤ 大齋第三主日 第1調 】

司祭) なんぢ へいあん
爾に平安、

誦經) なんぢ しん
爾の神にも、

司祭) えいち
睿智、

誦經) アリルイヤ、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{なんぢ いにしえ え なんぢ かい きおく} 爾が古より獲たる爾の會を記憶せよ、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{かみ わ こせい おう すくい ち なか な} 神、我が古世よりの王は救を地の中に作せり、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リ ル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ} 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世々に、アミン。)

【 ^{エヴァンゲリオン} 福音經 マルコ福音書37端 8章34~9章1節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



なんぢのしんにも。
爾 神

司祭) マルコ傳の聖福音經の讀、



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮



はなんぢにきす。
爾 歸

司祭) 謹みて聴くべし、主謂えり、我に従わんと欲する者は、己を捨て、其十字架を負

いて我に従え。蓋己の生命を救わんと欲する者は、之を喪わん、我及び福音の

ため己の生命を喪わん者は、之を救わん。蓋人若し全世界を獲とも、己の靈

を損わば、何の益かあらん。抑人何を與えて、其靈の償と爲さんや。蓋此

の姦惡の世に於て、我及び我の言を耻ぢん者は、人の子も其父の光榮を以て聖な

る天使等と偕に來らん時彼を耻ぢん。又彼等に謂えり、我誠に爾等に語ぐ、此に立て

る者の中には、未だ死を嘗めずして、神の國が権能を以て來るを見んとする者あり。

(比較用 口語訳) 主は彼らに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。邪悪で罪深いこの時代にあつて、わたしとわたしの言葉とを恥じる者に対しては、人の子もまた、父の栄光のうちに聖なる御使たちと共に來るときに、その者を恥じるであろう」。また、彼らに言われた、「よく聞いておくがよい。神の國が力をもって來るのを見るまでは、決して死を味わわない者が、ここに立っている者の中にいる」。



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮



はなんぢにきす。
爾 歸